

菊池短歌会 7月詠草

青空と流るるしらくも湛へるて山の「御池」は風
薫るなり 岩永 典子
諦らめも生きる一つの手段とや思ひ直して今日は
暮れたり 梅野かをり
早苗田に雲うつしるて南風の中胸摺ることく燕と
び交ふ 黒田 衣子
大輪の芍薬いまぞ咲き満てり傘支へ差す雨の予報
に 古賀 勝士
成らぬ歌ひとつ残して灯を消せば眠らぬ虫もをり
て鳴くなる 竹野美智代
塔なして白き紫陽花咲き上り吸はるる如くわれは
寄りゆく 中川 愛子
土に生き鳴くと思へば親しもよ仕舞湯にきく田蛙
のこえ 中原ちえ子
光化学スモッグおほふ昼時を五官いとしみ野戻り
急ぐ 村上 咲江
梅干して母の匂ひの中にある強き陽差しにわが影
累ね 山下 菊代
所在なき梅雨の一日よ生業に追はれし日々の過ぎ
りてゆくも 山代 静子



万句の里俳句会 7月句会

只管に葉陰に耐へて梅雨の蝶
初蟬の薄日ひろいて鳴き出しぬ 中路 郁子
尋ね来し山の学校ほととぎす 高木 陽子
青蛙一音あげて雨を呼び 鋤本 トミ
母と子の話のつきぬちらしらずし 田中ひさ子
密かにも素直に咲いて振り花 東 鈴子
みどりごを抱きて日暮の霊迎 稲田 矜子
蛍の水に育てば水に燃え 梅田 昭子
ひとときの晴れ間むさぼる蟬時雨 光本とよいち
一輪の木槿に風の新しく 小山 照子
雨上るとんぼうの群どつときし 田中 美智
さゝ波の涼しく走る山の湖 吉井 綾子
丸山美代子

肥後狂句桜会 例会入選句集より

金婚式 これから媽もむぞがろう 小川 繁美
ハイ只今 飲み屋に負けん酒香 高倉 新米
わさもん好き 通販さんのよか餌食 須藤 新生
ひっかけて 首吊りしとる奴胤 狩野 本六
金婚式 アツと言う間の如つもある 太田 雄三
甘過ぎる 媽にはいつもイエスマン 窪田 明德
右も左も 道路工事でフン詰まり 東 栄次
ハイ只今 婆ちゃんオムツ替えようね 田中 孝幸

泗水短歌会 7月詠草

白雲と夕焼雲を西空に夕暮れ時の満月清し 宮本 峯子
飼ひ主に似ると言ふ猫あわて者書棚より落つ吾は
笑はむ 福原美智子
雨降れば子育忙しつばくろの道すれすれに虫追い
つゞく 中山 定子
食卓にピンクの薔薇を二本挿しひとりの夕飼倅せ
気分 大島 ひと
子供会と蒔きし向日葵一斉に咲き県道ひとときわ照
らす 高藤タツノ
露草の若葉清しく狭庭占む生れ来る女孫待たるる
朝 吉安 永子
八反歩の新田田植え黙々と植えゆく息子の姿見守
る 増田久美子
阿蘇高原の光と風の中に立つ風に乗る君此処にお
りませ 長尾はるみ
仏前に供へし西瓜一句を過ぎて動かず曇り日土用
内田つね代

せせらぎ俳句会 7月例会

正眼の構え可笑しき子かまきり 服部 静子
一病の癒えを願ひて星祀る 藤本アツ子
風鈴を吊るも梅雨明け待つ心 内村 泊虹
雨後の墓苔やはらかく洗ひけり 藤本 邦治
海遠く住みて海の日浜万年青 坂本まつえ
梅雨激し伸び放題の庭のもの 村山 数恵
幼な等の幸せ祈り星祭る 寺本 和子
夏休み勉強机に汗落とし (中二) 渡辺 一史
夏休み大忙しの幕開けた (中二) 渡辺 大寿

肥後狂句水笑会 7月例会

日帰り旅行 車乗るため行たこたる 三水
日帰り旅行 昼飯食ふと戻らにゃん 江彩
難しさ パソコンはもう打ち止めゆう 水光
難しさ 分ける遺産はアリのしこ 英坊
力量者 体ひとつで資産家に 五女
力量者 なかなかおらん議員選 美由
日帰り旅行 きちいばかりで家がええ 三代
日帰り旅行 帰りなすなて媽が言う 好茶

七城短歌会 7月詠草

退院のわが目に沁みる木戸の辺の庭木の青葉五月
雨に光る 森 道子
麗しきはカサブランカにも似し姪が花時期世を去
るまだ若くして 吉間 充子
告知ある夫の病室に夕日差す明日が来ない世や国
無きか 岩崎 照代
「おばあさん」と声かけ遺影に手を合わす安堵を
貰い今日が始まる 木下 陽子
新緑の庭に一輪山吹の黄色き花を蝶と見まごう 岩津 涼子
代掻きのトラクターの先幾重にも波押し立て行き
津波を思う 佐々 重弘

旭志文芸俳句会 7月詠草

茄子紺の美しき初なり仏壇へ
新緑の鞍岳さんはくつきりと 芹川のり子
草取りの一腰伸ばす青葉風 郷 ミヤ子
流れ来る千の風聞く夏夜 水谷 ミネ
思案して今年も漬ける梅一斗 工藤 房子
雷雨来てときれときれの話かな 東 芳子
雷雨去れば頭上に炎暑待ちかまえ 中尾ヨシコ
出田みどり

